



■ 平城宮跡資料館の改修（その2）

平城宮跡資料館は、4月24日のリニューアルオープンに向け急ピッチで準備を進めているところです。資料館の大まかな展示内容は、奈文研ニュース2009年6月号でご紹介させていただきましたが、展示の検討が進み、さらに具体的になってきましたので、ここで再度ご案内いたします。

まずは、入口からロビーにお入りください。奈文研のロゴマークである隼人の盾が皆様をお出迎えします。インフォメーションルームに進むと、奈良時代や平城宮・京についての簡単な解説がされております。ここで予備知識を得ることができます。ガイドンスコーナーでは発掘調査の模型を展示し、研究所の調査風景を垣間見ることができます。また復原された平城宮のすがたを、大型ディスプレイによる映像でご覧いただけます。年表では、平城京成立前から現代までを紹介しながら、宮跡の保存運動にもふれます。

次のコーナーに足を踏み入れると、そこはもう奈良時代。東の若草山と外京の街並みの向こうから覗く第一次大極殿院の模型を朝靄が包んでいます。歩みを進めると、官衙（役所）コーナーへと続きます。

省内省の復原建物を参考に、連子窓に囲まれた建物内部には、机や棚、文書や文房具が配置され、当時の役人のオフィスを再現しています。続く宮殿コーナーでは、白木の柱に屏風、床には絨毯が敷かれ、宮殿の寝室・書斎・居間・食卓が再現されます。調度に正倉院宝物の復原品も置いています。

ジオラマを後にして次は遺物展示コーナーです。入って右手は出土品からわかる平城宮のすがたを、暮らし・税・まいに、国際交流といった切り口でご紹介します。向かい左手の研究室コーナーでは、木簡や土器・瓦などの遺物が各研究室でどのような視点で研究されているのかを解説しています。

ミュージアムショップを抜け、さらに奥に進むと、考古科学室です。保存科学の機器などを設置します。

そして最後のコーナー、企画展示室では来年度中に秋の大木簡展を含む3つの企画展を計画しております。

リニューアルオープン直前の4月22日には、関係者をご招待した内覧会をおこなう予定です。

現在、解説パネルの原稿作成も佳境に入っています。オープンに向かっての最終準備が整いつつあります。これまでご不便をおかけしてきましたがどうぞご期待ください。

（企画調整部 渡邊 淳子）



発掘調査の概要

藤原宮跡大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第160次）

2009年7月から開始した大極殿院回廊の調査では、回廊および関連する遺構を確認したあと、藤原宮の造営に関わる遺構を追求するため、10月より大極殿院内庭や朝堂院朝庭に敷かれた礫を一部取り外し、下層遺構の調査をおこないました。

昨年度の朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第153次）では、藤原宮の中軸のやや東を南北に通る幅4m、深さ2mの運河が、大極殿院南門の南において方向を変え、北東方向へ延びる幅約2m、深さ0.7mの斜行溝として、掘り直されたことが判明しました。

今回の調査では、この斜行溝が南門を避け、南北溝（幅3m、深さ1.2m）として北へ延びていく状況が明らかになりました。さらにこの南北溝は、回廊の南において回廊建設地を避け、東西大溝（幅3.5m、深さ0.9m）へと付け替えられていきました。

これらの運河、斜行溝～南北溝、東西溝は、資材運搬や排水を目的として掘られたと考えられます。これら遺構の前後関係から、大極殿院南門近辺の造営過程がより具体的にわかつてきました。はじめに運河を利用して、遠方より朝庭部分に資材を運び込みます。そして南門を建設する際には、運河を埋め立て、斜行溝～南北大溝として掘り直します。次いで回廊を建設するため、回廊以北の南北大溝を埋め立て、東西大溝に付け替えます。最後に、造営に使われた溝を全て埋め立て、朝庭の広場部分を造成し、礫で舗装する、という順序で造営されたようです。

調査中は、藤原宮跡に蓮やコスモスの咲く時節で、調査地にも多くの皆様が立ち寄られました。また、去る11月29日の現地説明会では、950人の方々にお越しいただき、大変盛況となり、一同感謝しております。

（都域発掘調査部 高橋 知奈津）



調査区全景(西から。右のL字溝が造営期の大溝)

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第159次）

キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなう檜隈寺周辺の調査も2年目を迎えました。今回の調査は檜隈寺のある丘陵の東裾部に5ヶ所、講堂の北西に1ヶ所の調査区を設け、調査をおこないました。

東漢氏の氏寺である檜隈寺はキトラ古墳の北西約600mに位置し、これまでの調査で、塔・金堂・講堂などの主要伽藍が確認され、西を正面とする珍しい伽藍配置が明らかとなっています。

丘陵裾部の調査区では、掘立柱建物6棟、総柱建物1棟を確認し、それらの建物が東西や南北方向にのびる塀によって区画されていたことが明らかになりました。また、建物や塀が建っている平坦地は、東へ落ちていく丘陵の裾部を整地して造成されていましたことがわかりました。これらの建物や塀の柱筋の方向は丘陵の方向とほぼ並行しており、地形に合わせた建物配置がなされていたようです。さらに調査区内では、焼成遺構や埴羽口など工房の存在を示す遺構や遺物を確認しており、檜隈寺に附属する施設であった可能性が考えられます。これらの生産関連遺構・遺物は丘陵の反対側にあたる西裾部でも見つかっており、丘陵全体が寺院地として利用されていましたことがわかります。

今回の調査で、丘陵の上に主要伽藍が並び、丘陵の裾部に倉庫や工房などの諸施設が、丘陵をぐるりと囲むようにして配されていた檜隈寺の姿が浮かび上がってきました。（都域発掘調査部 若杉 智宏）



丘陵東裾部の東西塀(東から)

平城宮東院の調査（平城第446次）

平城宮の東院地区は奈良時代を通じて、皇太子の居所である東宮や、称徳天皇の時代の東院玉殿や光仁天皇の時代の楊梅宮などの宮殿がおかれ、儀式や宴会に利用されたことが知られています。

奈文研では2006年度から五ヵ年計画で、東院地区の重点的な発掘調査をおこなっています。今回の調査地は、中枢部の北西と推測される場所でした。調査面積は1505m²、2009年10月1日より開始し、現在も継続中です。

調査では、建物11棟、掘立柱塀7条、溝5条、不明遺構1基を検出し、これらが6時期にわたって建て替えられたことがわかりました。これまで、西に隣接する調査区では基壇をもつ門、南に隣接する調査区では大規模な総柱建物群を検出していました。今回の調査では、門に接する幅約15m（50尺）の東西方向の通路を検出し、南の調査区外から引き続き大規模な総柱建物が建てられていたことがわかりました。ただし東西方向の通路は1期と6期、大規模建物群は2、3、5期と時期が異なります。また東院西北部の大規模総柱建物は、從来3期から確認

されていましたが、2期にまでさかのほることもわかりました。

さらに土地の使われ方の変遷にも特徴があります。これまでの東院中枢部の調査では5時期の変遷を確認していましたが、今回、6時期の変遷を確認しました。新しく加わった4期は、総柱建物群が形成された2、3期の後に宮殿・官衙的な建物配置をとり、その後の5期には再び総柱建物群が形成されることから、前後の土地利用が断続する時期といえます。つまりこれまで、東院西北部を倉庫空間として理解していましたが、今回調査においては儀式・実務の空間として利用された時期が、その間に挟まることがわかりました。この変遷の意味を、周辺調査の成果から意義づけていくことは今後の課題です。このように、6時期にわたって大規模な建物が重複しながら、ダイナミックにプランが変更されて建て替えられたことを明らかにしたことが、本調査の成果です。

今回確認された東院中枢へと伸びる東西の道は、東院の全体構造解明への道ともなることでしょう。

（都城発掘調査部 鈴木 智大・国武 貞克）



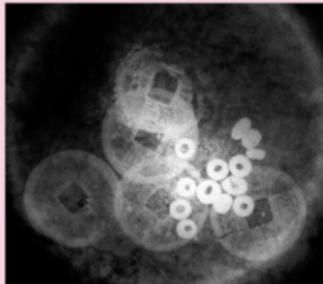
第446次調査区全景（西から）

興福寺南大門の鎮壇具

2009年7月～12月に実施した興福寺南大門の発掘調査では、基壇中心部から須恵器の広口壺が出土しました。出土位置などから南大門の鎮壇具容器とみられたので、写真撮影・実測作業をおこなったうえで取り上げました。その取り上げは、奇しくも再建工事が進む興福寺中金堂地鎮・鎮壇法要の前日（2009年11月6日）のことでした。

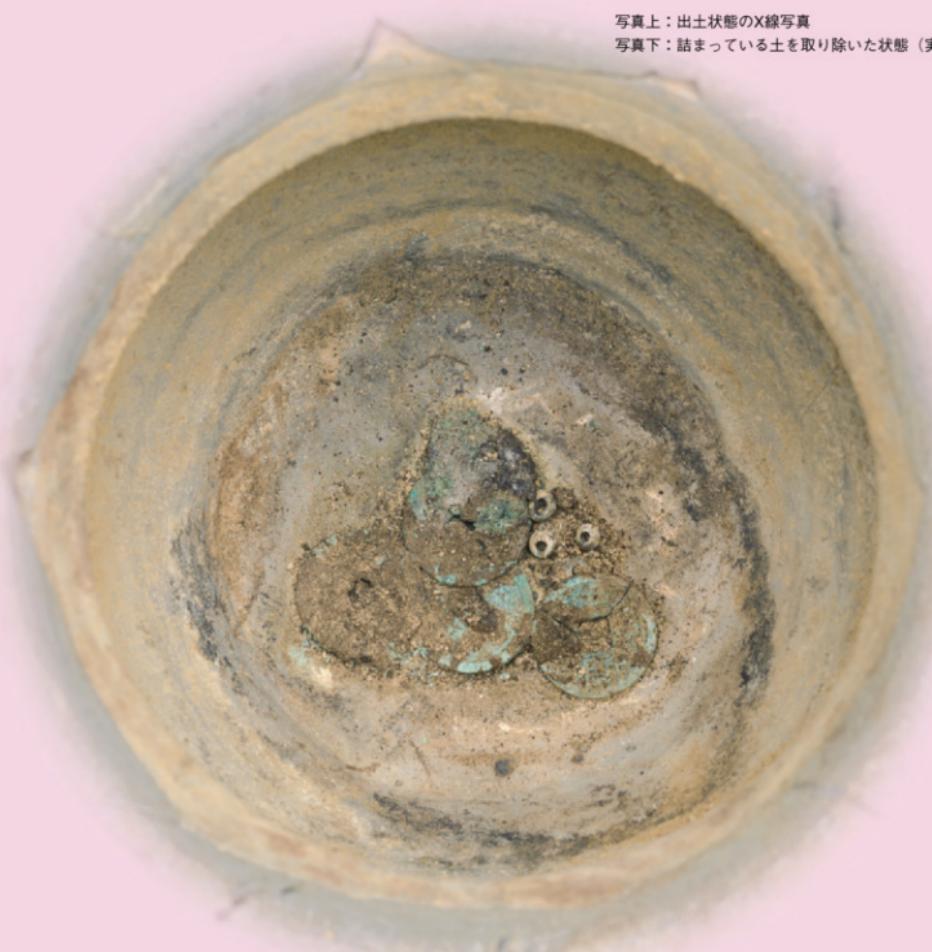
X線透過撮影と高エネルギーX線CT撮影とにより、壺の内部に銭貨5枚、鉛ガラス製とみられる小玉13点が納入されていることが判明しました。これらは壺の底部にあり、ガラス小玉の上に銭貨が重なっています。銭貨はその銭面から和同開珎と判断でき、奈良時代の鎮壇具であることがわかりました。現在は発掘調査を終え、鎮壇具の詳細な検討を進めています。内容物の解明にご期待ください。

(都城発掘調査部 森川 実)



写真上：出土状態のX線写真

写真下：詰まっている土を取り除いた状態（実寸大）





鎮壇具出土狀況

文化的景観研究集会(第2回)の開催

景観研究室では、2009年12月18・19日の2日間に渡り、文化的景観研究集会（第2回）「生きたものとしての文化的景観－変化のシステムをいかに読むか」を開催し、200名余りの参加を得ました。文化的景観は、物理的なモノありきではなく、読解によって浮かび上がってくる領域的なまとまりであることと、そしてそれが時間をかけて徐々に形成されたもので、現在も生き、変化しながらもアイデンティティを保ち続ける、いわば生き物のごとき性格を有するものです。本年度の研究集会では、「生きたもの」としての文化的景観における変化のシステムのとらえ方を、議論の主題として設定しました。

1日目は、「文化的景観における変化のシステム」をテーマとしました。文化的景観における変化の現象把握としては、横張真氏による近江八幡の水郷景観における葦原の変遷が示唆に富んでいます。50年間の葦原の領域を追いかけると、明らかに場所が移動していくながら、面積の総和には大きな変化がないことが明らかにされました。

変化に関しては有形の要素が問題にされやすいわけですが、文化的景観は有形と無形の要素が相互に絡み合いながら成り立っているものであるため、2日目は、有形と無形の関係、つまりモノとコトの関係をテーマとしました。モノにこだわりすぎると、変化を必然とする文化的景観の本質を見誤ることが指摘されましたが、言い換えれば、モノとコトを横断的にとらえねば文化的景観の価値評価はなしえない、という提言と受け取ることができます。

モノとコトとのバランスを、いかに現状の保護制度によって担保していくのか。この議論を次年度以降の活動に活かしたく思っています。

（文化遺産部 清水 重教）



文化的景観研究集会(第2回)における総合討議

カンボジア初の遺跡博物館オープン

カンボジアのシェムリアップ州に位置する世界遺産アンコール・ワット寺院の北東約20kmに、タニ窯跡群は位置しています。ここは、アンコール王朝時代（802～1431年）に、クメール陶器を生産していた窯跡群です。このたび、2009年12月15日にタニ窯跡等出土の陶器を展示したアンコール・タニ窯跡博物館が開館しました。

タニ窯跡群は、1995年にカンボジアで初めて確認・調査された窯跡です。1996年から2001年にかけて奈良国立文化財研究所（当時）と上智大学が発掘調査・研究をおこないました。その後、次々とクメール陶器窯跡が発見・調査され、このタニ窯跡群調査は、クメール陶器研究の先駆けとなりました。

その後、現地の文化財組織APSARA（アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構）は、日本国政府による草の根無償援助とカンボジア政府からの資金援助を受け、タニ窯跡に遺跡博物館を建設する事業を開始しました。奈良文化財研究所は、博物館の展示計画から、模型制作、出土陶器の修復と展示、展示映像作成などで全面的に協力し、このたびカンボジア初の遺跡博物館の開館となりました。

開館式典においては、奈文研の功績に対し、カンボジア政府からサハーメトレイ勲章が当研究所所長へ贈呈されました。

アンコール・タニ窯跡博物館には、昨年度に奈文研で研修を受けた若手研究者が学芸員として常駐し、今後さらなるクメール陶器研究への貢献が期待されます。

奈文研では、アンコール遺跡群内に位置する西トップ寺院の調査・研究を実施しており、遺跡修復活動を視野に入れた新たな事業を計画中です。

（企画調整部 佐藤 由似）



田辺所長による開館テープカット

【退職者のひとこと】

想ひ出

私が入所した頃、平城宮跡の大極殿に象徴的な1本の松が生えていた。草が覆い茂り平城宮跡は廃墟そのものであったが、雨の日も風の日も1本の松は踏ん張っていたのを覚えている。

私が研究所に入った翌年、ビーナツで有名なロッキー事件が起こった。日本は高度経済成長期を迎える、発掘調査件数は毎年増加した時代である。その頃は、文化財関係者も増加の一途をたどった。発掘調査から保存処理まで、すべてが元気な日々を過ごしていた。前に進むことしか考えていなかった。大晦日、正月も研究所で仕事を続ける年もあった。かつては、西大寺周辺には何もなく、静かだった。今のようなジャスコや百貨店、銀行などなかった。その後、次々とビルが建設され、今では昔の面影はない。

昭和が終わり、平成の時代を迎えて、日本は徐々に失速してゆくを感じた。そのような中で阪神・淡路大震災が起こった。文化財と防災について深く考えさせられた事件であった。

定年退官数年前に、思ひがけない重大な仕事が飛び込んできた。高松塚古墳の石室解体である。最後の大きな仕事として一生忘れないだろう。

物質の劣化は一方向にしか進まない。可逆的な反応ではない。人間でも個人差はあっても、二十歳を過ぎると劣化は、一段と進むと言われている。可能な時と適切な処置によってのみ、劣化を遅らせることができる。時期を逃すと、劣化のスピードを抑制することは不可能である。

現在、平城遷都1300年祭に向けて準備が進められている。通勤電車の窓から日々変わりゆく姿を見ている。30数年前にこの姿は想像できなかった。

(副所長 肥塚 隆保)



副所長室にて

都城制覇!!

奈文研在職中に島根県・荒神谷遺跡出土の青物(青銅器)撮影、古代出雲展の撮影、加茂岩倉遺跡の撮影をしたことでの、私のアダ名のひとつに「青もんのぎゅうちゃん」がある。私は文化財カメラマンを目指した時、日本では出雲・吉備・北九州地域の撮影をすることを夢見ており、島根では楽しい日々を経験させてもらった。感謝の気持ちでいっぱいである。

平城では長屋王邸から出土した未洗いのコンテナが、今の小講堂(当時、写場)の前に山積みになっており、「なんばあんねん!!」と。明けでも暮れても木簡ばかり、という時もあった。私は同じ仕事・動作をやり続けるということができない性分なので、知らず知らずのうちに木簡の撮影は佃さんの担当ということになった。自然な成り行きであろう。

もうひとつの夢が、京都市にいたころ何度か唐代の資料を中国や日本で撮影した経験があり、「いつかは大量の唐三彩を撮影したい」であった。この夢も奈文研に来たからこそ叶った夢である。河南省文物考古研究所では嬉しさのあまり、ついつい泥だらけの獸足壺をなめまわしてしまった。「泥の味の記憶」が今も残っている。

学生時代に大津京、卒業してから京都市埋文研にいたので平安京・長岡京、それに合間に大阪市からの依頼で難波宮の撮影にたずさわった。そして平城京、中国でも漢長安城、唐長安城、そして最近の漢魏洛陽城と関わってきた。これからこんなカメラマンは出ないだろう。これだけは自慢してよさそうだ(藤原京は一枚も撮ったことがない)。

今後、九州に本拠地を置き、韓国や中国で撮影ができるという新たな夢を叶えるため、もう一踏ん張りしなければなりません。(企画調整部 牛鶴 茂)



漢魏洛陽城の現場にて

飛鳥資料館来館450万人達成

2009年11月11日に、飛鳥資料館開館以来の来館者数が、450万人に達しました。飛鳥資料館は、1975年3月に奈良国立文化財研究所（当時）の研究成果を発表する場として、また飛鳥の文化を広く紹介する資料館として開館いたしました。それ以来、35年で450万人達成ですので、年間平均13万人ほどになり、これまで多くの方々にご来場いただきました。

この450万人達成に際して、飛鳥資料館ロビーにおいて記念イベントをおこなうことになりました。記念すべき450万人目の来館者は、修学旅行で飛鳥資料館を訪れていただいた、学習院女子高等科の皆様でした。生徒さんの代表と校長先生に、くす玉を割っていただき、記念の品を贈呈いたしました。

また、今年の5月には当館においてキトラ古墳壁画四神の公開という大きなイベントが控えています。公開期間中には、たいへん多くの方々のご来館が予想されます。少しでも多くの方々に楽しんでいただけるよう、よりよい展示を考えているところです。来館450万人という、数字に甘んじることなく、さらに多くの方々にお越しいただけ

るよう、学芸室一同気を引き締めて、ご満足いただける展示企画にあたっているところです。

（飛鳥資料館 成田 勝）



校長先生と生徒代表

■ お知らせ

平城宮跡資料館リニューアルオープン

2010年4月24日から平城宮跡資料館がオープンします。
公開 9:00～16:30（入館は16:00まで）

*平城遷都1300年祭（平城宮跡会場）開催期間（2010年4月24日～11月7日）は無休です。また、曜日等により開館時間が17:30まで延長される場合があります。

特別公開講演会（東京会場）

2010年5月15日（土）

於：江戸東京博物館

テーマ「大極殿復原」

講演者 島田敏男 文化遺産部建造物研究室長
馬場 基 都城発掘調査部主任研究員

公開講演会（第106回）

2010年6月12日（土）

於：平城宮跡資料館 講堂

講演者 中川 あや 都城発掘調査部研究員
高田 貴太 都城発掘調査部研究員

飛鳥資料館 春期特別展 「キトラ古墳壁画四神」

2010年4月16日（金）～6月13日（日）

「壁画特別公開」

5月15日（土）～6月13日（日）

平城宮跡歴史文化講座（第11回）

（NPO平城宮跡サポートネットワーク主催）

2010年5月16日（日） 午後1時30分～

於：平城宮跡資料館 講堂

「古文書からのアプローチ」

奈良女子大学教授 館野 和己

■ 記録

埋蔵文化財担当者研修

- | | | |
|-----------|-----------------|-----|
| ○遺跡整備活用課程 | 2010年1月12日～22日 | 15名 |
| ○報告書作成課程 | 2010年1月28日～2月5日 | 21名 |
| ○地質環境調査課程 | 2010年2月16日～24日 | 14名 |

現地説明会

- | | | |
|-------------------|---------------|------|
| ○平城第446次（平城宮東院地区） | 2010年2月20日（土） | 840名 |
|-------------------|---------------|------|

現地見学会

- | | | |
|----------------------|---------------|--------|
| ○飛鳥・藤原第161次（甘樺丘東麓遺跡） | 2010年3月20日（土） | 1,245名 |
|----------------------|---------------|--------|

飛鳥資料館 冬期企画展

- | | |
|---------------------|------------------------|
| ○展示
「飛鳥の考古学2009」 | 2010年1月22日（金）～2月28日（日） |
|---------------------|------------------------|

■ 最近の本一冊の著作から

- | | |
|--------------------------|---------------|
| ○馬場 基『平城京に暮らす－天平びとの泣き笑い』 | 吉川弘文館、2010年2月 |
|--------------------------|---------------|

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2010年3月